

001 健

	読書日 2012年	タイトル	著者 出版社	表紙	コメント	評価
1	0901- 0903	船手奉行うたか た日記 巢立ち雛	井川香四郎 幻冬舎文庫 560円 (古200円)		新米同心早乙女雛左の活躍を描くシリーズ2作目。船手奉行とは今で言う海上保安庁のようなもの。町奉行より低く見られていたが江戸の町は運河が張り巡らされた水上都市と言ってよく陸とは違う広い範囲の捜査権を持っていた。時代劇などではあまり描かれていない組織の仕組みや役割が話の中に上手く解説されているのが良い。「巢立ち雛」「諍いの宿」「飾り舟」「黄金の観音様」の4編を収録。	
2	0904- 0915	ソロモンの偽証 第1部 事件	宮部みゆき 新潮社 1,890円 (古1,200円)		741頁と分厚い。クリスマスの朝、校舎の傍らで雪に埋もれた少年の遺体が発見された。付近の様子から事件性が無く校舎の屋根から飛び降り自殺を図ったものと判断された。少年はいわくつきの人物であり遺書も無いことからさまざまな憶測・思惑が生まれる。あるものは悪意から、あるものは歪んだ正義から。いじめや少年犯罪、ネットの誹謗・中傷、報道のあり方など多くの問題を孕む作品だが事件は起きたばかりの序章。構成が「理由」「模倣犯」に似ているのでDG読者には不評か？	
3	0916- 0918	往復書簡	湊かなえ 幻冬舎 1,470円 (潮田地区センター)		「十年後の卒業文集」地元の月姫伝説の願掛けで中学生たちが起こした事故の真実。 「二十年後の宿題」映画「北のカナリア」の原作。恩師から教え子の教員へ依頼された事故にまつわる生徒の去就。 「十五年後の補習」火事をきっかけに交際し婚約直前の男が海外ボランティアへ行った理由。 以上、三つの作品を収録。いずれもいつもの手紙のやりとりにより過去が明らかにされる物語。	
4	0919- 0922	金四郎はぐれ 行状記 仇の風	井川香四郎 双葉文庫 650円 (古150円)		「石に咲く花」「真女」「女の花道」「仇の風」の4篇を収録。遠山の金さんシリーズ。設定は金さんの若くて若い時期。事件を解決するたびに人生経験を深めて桜の花びらが一枚ずつ彫られてゆく。	
5	0924- 0924	冥土めぐり	鹿島田真希 河出書房新社 1,470円 (文藝春秋 2012年10月 号)		2012年第14回芥川賞受賞作品。 過去の裕福に執着するモンスター親子(母・弟)は借金を重ね娘とその夫からも執拗に搾取しようとする。唯一逃れ得た手段が不意に訪れた夫の脳障害だった。 搾取しようにも娘とその夫にはさほど財力は無く現実にはすぐ破綻し作品が成り立たないと思うしそこまで要求に応じるのも非現実的。 文章はうまく読みやすいけどつまらん。	

6	0925-0927	残火	西村健 講談社 1,785円 (川崎図書館)		古き任侠道に生きバブルの時代に地に墮ちた任侠に見切りをつけ引退していた老雄が犯した1億円強盗。事件は議員会館で起き奪われた金は政治工作用の裏金。裏金の存在を知られた理由。奪った目的を巡って暴力団と警察権力の追跡が始まる。雰囲気はハードボイルド。
7	0928-1002	饗宴 ソクラテス最後の事件	柳広司 原書房 1,890円 (川崎図書館)		ペルシア戦争に奇跡的に勝利した直後のアテナイの都市には不穏な陰が忍び寄っていた。つまらぬ訴訟を楽しむ民衆。そんな中、連続して起きた不可解な惨殺事件。ソクラテスは物証に囚われることなく現象から起きる可能性を理論的に考証して事実を暴く。 事件を取り巻く状況設定は面白いので歴史考証について行けるかどうかの方がより作品を楽しめるポイント。
8	1003-1006	金四郎はぐれ行状記 大川桜吹雪	井川香四郎 双葉文庫 650円 (古150円)		読み順が後になったがこの本が金四郎シリーズの1作目。周りを取り巻く人物には時代劇によく出てくる人物も多く登場するが異色な設定になっているので時代劇通には違和感があるかも知れない。
9	1007-1009	グッバイ・ヒーロー	横関大 講談社 1,575円 (川崎図書館)		「困っている人がいたら助けなければならない」ピザの配達員が巻き込まれた立てこもり事件。訳有りの人質「おっさん」をひそかに救出するもののおっさんには運び屋という裏の顔が。亮太がヒーローかと思いきや本当のヒーローはおっさん。ライトノベルだがこれは結構読める。 2章が短いけれどこれはエピローグに当たる部分。
10	1010-1011	光媒の花	道尾秀介 集英社 1,470円 (川崎図書館)		とある河原を接点に町に住む者たちの人生が交錯する6章からなる群像劇。大切な何かを守るためにつく悲しい嘘、絶望の果てに見える微かな光。「隠れ鬼」「虫送り」「冬の蝶」「春の蝶」「風媒花」「遠い光」の6篇。 最初の3作品はデビュー当時の重苦しい嫌な後味のするものだったが後半は救済のストーリーへと繋がりはっきりとする。

11	1012-1014	珈琲屋の人々	池永陽 双葉文庫 650円		「初恋」で始まり「再恋」で終わる―。東京のちいさな商店街にある喫茶店『珈琲屋』の主人・行介は、バブル期の地上げに抵抗して人を殺したことがあった。当時、行介の恋人だった冬子は別の男性と結婚したが、行介が出所すると冬子は離婚していた。冬子に何があったのか…。商店街に暮らす訳ありの人々が『珈琲屋』を訪れ語った七編の連作短編集。
12	1013-1013	ガリレオ8 禁断の魔術	東野圭吾 文藝春秋 1,470円		ガリレオシリーズは週刊誌、月刊誌に連載された後、単行本になるのが普通だがこれは珍しく書き下ろし。 従来物理トリックと科学者としての心情・信念を融合させて作品にしたところが良い。湯川の教え子が初登場する。
13	1015-1017	殺人ライセンス	今野敏 有楽出版 900円 (古150円)		ネット上に忽然と現れては消える不気味なオンラインゲーム『殺人ライセンス』。ターゲットにされた人間が数日後に実際に殺されてゆく。それに参加したパソコンオタクの高校生キュウは、同級生の父親である探偵(志望の)相沢と解決に乗り出す。読みやすい文体でさらっと読了。今ではありきたりの内容だが書かれた時期を考えると先端を行っていた作品と言える。新しいものを取り入れると作品が古びるのが早いのは仕方がない。
14	1018-1021	珈琲店タレーランの事件簿	岡崎琢磨 宝島社文庫 680円		タイトルに「古書」「珈琲」の文字が含まれているとつい眼がいてしまう。 装幀が「ビブリア古書堂」に似ているせいか古書が珈琲に変わっただけで作風もよく似ているが作家は違う。京都の人知れぬ路地にひっそりとある古い喫茶店を舞台に起きる些細な事件を解決する短編集。 珈琲、京都好きにはそれなりの蘊蓄が楽しめる。
15	1022-1025	ナニワ・モンスター	海堂尊 新潮社 1,680円 (川崎図書館)		海堂尊といえば医療ものという感じだったのでこれは裏切られた感じだったが重厚で面白かった。いつもの医療ものに見せて司法、政治家など権力を望む者たちの暗闘、駆け引きなどシリアスな中にお遊びとしてお馴染みの白鳥などもちよい役で登場する場面がある。

16	1026-1026	三島屋百物語 「まぐる笛」 オール讀物 2012/8月号	宮部みゆき 文藝春秋社 1,000円		三島屋シリーズは2巻が単行本化。その後5本ほど書かれているので3冊目の発行も間近。
17	1027-1028	龍之介怪奇譚	小沢章友 双葉社 1,890円 (川崎図書館)		「酒虫」「妖婆」「幻燈」「往生絵巻」「黒衣聖母」「歯車」龍之介の周辺で起きる怪異な現象は作品をなぞらえるかのような現象。雰囲気はあるがこれといってオチの無いストーリー。 晩年の龍之介の人間関係が窺えて面白いが章題になった作品で読んだのは「歯車」のみ。後は作品名も知らなかった。
18	1029-1101	美術手帖 2002年11月号 荒木飛呂彦	美術出版社 1,600円		週刊ジャンプ掲載「ジョジョの奇妙な冒険」、少年誌を超えた内容で現在は月刊ウルトラジャンプにて第8部が連載中。スタンド(自我・願望が能力を持って具現化した守護神のようなもの)の概念が人気を集め今や引っ張りだこ。絵がビジュアル的なので展覧会も多く開催されているが美術手帖といういわば学術誌にこれだけの頁を割いて掲載されるとは驚き。キャラクターの決めポーズなどは有名な美術品がモデルになっていることが多く併せて紹介されている。
19	1102-1112	JORGE JORSTER	舞城王太郎 荒木飛呂彦 1,995円 (古1,300円)		ジョジョの作家版というのは面白かった試しがないのでもう読まないと言ったばかりなのにまた買ってしまった。しかも今回は第1部～第7部までを作品の範囲にしているので800頁を超えるもの。冗長なのもっと読ませる工夫が必要。
20	1113-1117	過ぎし江戸の面影	双葉社 スーパームック 1,785円		幕末・明治にかけて訪れた外国人たちの見た日本の風景、風俗を画像とともに紹介・解説。出版の意図は外国人も驚いた当時の日本の技術・文化を紹介すること。 古い写真やスケッチを基にコンピュータによるカラー化を施した画像を原画と共に掲載しているのが味噌。 主に江戸の暮らし、街並み、文化を中心に紹介。

21	1118-1121	江戸明治 遠き日の面影	双葉社 スーパームック 1,785円		外国人から見たニッポンを知ることで古き良き日本を知る本。 江戸の風俗・行事の他、地方の風景、外人が驚いたジャパニーズ・カルチャーの数々を紹介。
22	1122-1203	日本奥地紀行	イザベラ・バード・著 高梨健吉・訳 平凡社 1,575円 (横浜中央図書館)		前記の本の中に紅一点のイザベラ・バードの存在を知り図書館の蔵書検索で調べて借りたもの。表紙の絵は著者本人が描いたスケッチ。彼女はイギリスの紀行作家とも言うべき存在で学問や技術を広めに来た外国人たちとは違う点が異色。1878年6月～9月にかけ東京-日光-新潟へ抜け、日本海側から普通の外国人なら行かない所、人の通らない道を選んで東北・蝦夷の旅をした。いわばお嬢様が未開の地を旅するようなものだが過酷な旅の中で貧しい地方の生活にも触れ日本の国・日本人の長所・短所など時には辛辣な感想も含めて綴っている。彼女はその後、朝鮮・中国の奥地へ旅立ち本を出している。なので歴史的観点で読みたいと思っている。
23	1204-1206	タウトが撮ったニッポン	酒井道夫・沢良子 編 武蔵野大学出版局 1,890円 (横浜中央図書館)		今で言えばデジカメ日記と言うよりはブログに近い。古き良きニッポン、原風景も多数あるが中には何でこんな物を撮ったのかという物も多い。外国人の視点で捉えた一枚と数行の添え書きが面白い。
24	1207-1214	植物学者モーリツシュの大正ニッポン観察記	ハンス・モーリツシュ・著 瀬野文教・訳 草思社 2,520円 (横浜中央図書館)		著者は 1922/9～1925/3 東北帝大に講師として招かれて仙台に赴任。植物生理学・解剖学を講義する。その間、北は北海道・樺太、南は鹿児島まで日本各地を精力的に訪れ大正期の日本の自然と人々の姿、国の姿を学者の持つ観察眼により克明に記録。先端技術を取り込むことから始めた日本の急成長ぶりと変わらない風習・暮らしぶりとの対比が良くわかる。 1923年9月の関東大震災は仙台で経験したが1日違いで真っ只中にいたかもしれないエピソードについては1章設けて綴っている。
25	1213-1216	樽屋三四郎言上帳 雀の涙	井川幸四郎 文春文庫 680円		樽屋三四郎言上帳の書き下ろしシリーズ8作目いつものように4作収録。 「無縁の花」「夜の鶴」「泥んこ」「雀のなみだ」 TVの時代劇作家でもあるので現代社会の問題・出来事などをアレンジしているので作品に入りやすい。硬めの本が続いたので軽いものを選んだ。